

館長講座 2021年度 「近代によみがえる古代神話」(フランス美術編)

第1回 2021年10月6日 「第三共和政の守護神」

樋田豊次郎

東京都庭園美術館 館長

みなさん、こんにちは。

館長講座は毎年開催してきたのですが、昨年からコロナの関係で、もうスケジュールが滅茶苦茶になりました。昨年は休館日が長かったので、開催しない期間もありました。この講座は毎年5、6回やっていたのですが、昨年は3回でした。今年も前期は開催しませんでしたので、この夏以降の3回ということになりました。

こんな風に不定期ですし、来ていただくお客さんの数も、かつては40人だったのですが、今はコロナであんまり「密」にしてはいけないというので、席を半分の20人に制限させてもらっています。開催できるかどうかの見通しが立たなくて、唐突でしたが9月に告知させていただいたのです。そんな具合なので、おそらくどなたの目にも留まらず、お客さんに来ていただけないのではないかという心配があったのですが、開けてみたらこんなに来ていただけました。本当にありがたい限りです。みなさん、どこで、こういうことを開催していると知ったのですか？

会場から 私はホームページで。

館長 そうですか。じゃあホームページをしょっちゅう見ていただいたのですね。

会場から たまたま、ここのお庭に来たくて、やっているのかなと思って調べたら。

館長 そうでしたか。それは、見ていただいてありがとうございます。今日試しに話を聞いてくださって、面白いなと思っていただけたら、どうぞ続けて参加して下さるようお願いします。

庭園美術館の女神

早速ですが、「近代によみがえる古代神話」というテーマでお話しさせていただきます。そもそも、どうしてこういうテーマを立てたかといいますと、この美術館に古代ギリシャ

風の女神をかたどったガラスのレリーフがあったからです。それは、われわれが本館と呼んでいる古い建物の正面玄関にあります。本館は戦前の昭和8年に建てられているのですが、その当時パリで流行していたアール・デコと呼ばれている芸術を日本に輸入した珍しい例です。私はここへ5、6年前に館長として来たのですが、これは一体どういうことなのだろうと興味をもちまして、調べてみました。

庭園美術館の本館は、日本の日常の空間や建物からすると変わっていますから、そのため変わった装飾があるのだろうというくらいに、みなさんは思われるかもしれませんが。けれども、それにしても説明がつかないのです。戦前の日本で、突然、ギリシャ神話から抜け出してきたような女神が、四体並んでいるのです。日本の古い神様が出てくるのならわかりますけれどね、そうではない。

それで調べていくと、実はアール・デコが流行したのは一九二〇年代、日本でいえば大正の後半から昭和の初期ということになりますが、この時期にはパリでも女神像がたくさん登場しているのです。

みなさん、パリにいらっしゃったとき彫刻の女神像をご覧になりませんでしたか。パリに行けば、まずはエッフェル塔でしょうけど、そのつぎにルーブル美術館に行けば、そこには女神像がたくさんあります。実は、屋外にも女神像はたくさん建っているのです。

そういう女神像を見てわれわれは、ここは芸術の街だから、昔から女神像が建っているのだろうと、なんとなく思いますけれど、実はそうでもないのです。この2、300年の間にたくさん建てられたのです。そういう下地があったので、東京でも昭和初期に女神が登場したというわけです。

古代日本の神々

それにしてもなぜだろうと思ひまして、まず同時期の日本ではどうだったのだろうと調べてみました。それが昨年の館長講座のテーマでした。そうしたところ、日本でも女神は思いのほかたくさん登場していました。今はあまり人気がないですけれども、天照大神はあまてらすおおみかみ戦前まではかなりの人気者でした。あのお方は浮世絵にずいぶん出てくるのです。とくに江戸末から明治にかけて多く出てきました。それから女神ではありませんが、日本武尊もやまとたけるのみこと人気者でした。こうした日本の神さまたちは、歴史の国定教科書にも登場します。

いま、こういう話をすると、人気がないというか、問題だといわれかねませんが、戦前のことです。そこには日本武尊や、日本から韓半島に渡って、馬韓、弁韓、辰韓に攻め入

った神功皇后^{じんくう}が出てきます。彼女は日本と韓半島との文化交流の基盤を整備した功労者として、国定教科書では扱われています。神功皇后は仲哀天皇^{ちゅうあい}の夫人なので、かならずしも神話の女神ではないのですが、想像上の人物らしいところもあって、女神の末席に加えさせてもらいました。

こうした話しを昨年度の館長講座で3回に渡って語って見たのですが、それを受けて今年、本場のヨーロッパ、フランスではどうだったのだろうということに、目を向けてみようと思った次第です。

それで、こういう趣旨文を書いてみました。ここで読ませていただきます。

2021年度の館長講座のテーマは、昨年度に引き続き、「神話」です。ただし昨年は「日本美術」を題材にしましたが、今年は「フランス美術」を題材にしました。そもそも館長講座のテーマに「神話」を選んだのは、フランスの「アール・デコ」に、ギリシャ神話の神々が出没していたからです。ですから、今年の館長講座には、いよいよアール・デコの本丸に攻め込むのだぞという意気込みが溢れています。ご期待ください。

「近代によみがえる古代神話」を、フランス美術を通して見ていくときに、日本美術を通してみていたときと較べて、もっとも注意しなければならないのは、フランス美術の場合、古代、とくにギリシャ神話から呼び戻された女神たちには、それらがもともと担っていた役割の発露が期待されていないということです。

たとえばアテーナーは、知恵、芸術、戦略の神でしたが、20世紀前半のフランス人たちが、彼女にそんな役割を求めた形跡はありません。こういう現象が起きたのは、女神たちをよみがえらせた人たちが、アンシャン・レジーム（旧体制）を倒して、ヌーヴォー・レジーム（新体制）を打ち立てた人たちだからでした。

つまり、王侯貴族とカトリックに取って代わって、社会の主導権を握った市民階級（ブルジョワジー）は、自分たちの存在を意味づける役割を、アテーナーをはじめとする女神たちのなかに、新たに構築しようとしたのです。だから市民階級は、古代の神々と手を組んで、市民社会を正当化する意味を創りだそうとしたことができるでしょう。

では、その意味とはなんだったのか。それをこれから、3人の女神に焦点を当てながら探っていきます。

いま読みましたけれど、文章が硬いですね。半年間、頭が止まっていて、コロナが終息したので久しぶりに書いたら、調子が出てないですね。やっぱり話言葉を交えながら、自分の体験や思いを組み込まないと言葉って通じないですね。なんだか大学の授業みたいに硬い話をしてすみませんでした。

さて、レジュメにはこれからお話しする講座の3回分が書いてありますが、今日はそのなかの1回目、「第三共和政の守護神 彫刻マリアンヌ」についてお話しします。このマリアンヌという女性、これは架空の人物です。

ついでにお話ししておきますと、2回目の「想像の市民社会」は、市民社会を形成したブルジョワジーが、自分たちの社会をどのように評価していたのかということです。ブルジョワジーは心の拠り所として、平和の女神を構想し、古代ギリシャから呼び戻したと仮定してみました。彼女は古代ギリシャの神話に出てくる女神です。でもこれから話すマリアンヌの方は、実はそのギリシャ神話には出てきません。

それから3回目の「想像の伝統社会」は、《ノルマンディーの女神》が主役です。フランスのノルマンディー地方ってお聞きになったことがあると思います。リンゴと、その蒸留酒であるカルヴァドスで有名なところですよ。パリから見て北西の海岸部です。そのノルマンディー地方には独特な文化があるのですが、そこには伝統文化をいまに伝える理想的な共同体が残っていると、ブルジョワジーは夢見たわけです。

これらを、これからお話ししていこうと思います。

マリアンヌ登場

さて、マリアンヌです。皆さんがパリにいらっしゃったとき、通貨はすでにフランからユーロに切り替わっていましたか？ かつては、1フランの下に20サンチーム、10サンチーム、5サンチームの硬貨がありました。これらのデザインに、マリアンヌが使われていたのです。

私はフラン時代にもパリに行っているんですが、正直、私は気づきませんでした。裏側には、フランスの理念が書かれています。

館長 理念とは、なんでしょう？

会場から 自由、平等、博愛

そう、その三つです。Liberté (自由)、égalité (平等)、そして fraternité (博愛)。最後の博愛は、最近では友愛と訳されることが多いようです。古い硬貨が残っていたので、持ってきました。マリアンヌを見てください。帽子を被っていますが、これはフリジア帽といます。古代のギリシャで奴隷の身分だった人が開放されて自由の身になったときに、この帽子を被ったそうです。赤い色をしていました。自由を象徴するためにマリアンヌはこの帽子を被っているのです。

マリアンヌがフランスの歴史に登場するのは、1881年くらいからです。日本でいえば1868年が明治元年ですから、明治中頃です。では、なぜこのような人物が構想されたのか。それが今日の話しの入口であり、同時に結論です。

ところで、この段階で、つぎの話を付け加えるべきか否か迷ったのですが、途中からみなさんが気づかれて、なんだかよくわからなくなってもいけないと思い、あえて先に話すことにしました。

それはみなさんご承知の、ウジェーヌ・ドラクロワが描いた《民衆を導く自由の女神》という有名な絵についてです。自由の女神が、右手で三色旗を掲げ、左手に銃剣をもち、右側のカウボーイ姿の男と、左側の山高帽の男を従えて、前に進んでいる絵です。

指摘しておきたいのは、この自由の女神とマリアンヌが、フランス人の認識のなかでは一体化しているということです。

この絵は1930年に描かれています。そして、同年にパリでおきた七月革命を舞台にしています。七月革命とは、ナポレオンが失脚した後、フランスは王政復古するのですが、それに抵抗して民衆がおこした革命です。

ドラクロワが描く自由の女神も、マリアンヌと同じように、赤いフリジア帽を被っています。そして彼女がかかっている三色旗は、先ほどの硬貨に書かれていた自由、平等、友愛を象徴しています。

ですから、マリアンヌと自由の女神は、その人格、神さまでですから神格ですか、それが一体化しているのです。ただし厳密にいうと、自由の女神はギリシャ神話にその名前がありますが、マリアンヌの方はありません。

ついでに言えば、アメリカの象徴として有名な、リバティ島に設置されている神さまも

自由の女神という名前ですね。正式には、《世界を照らす自由》というのですが、これはアメリカの独立百周年を記念して、1886年にフランスがアメリカに贈ったものです。

話を戻せば、フランスでは1789年にバスティーユ牢獄の襲撃で有名な大革命が起き、1793年にルイ16世と王妃マリー・アントワネットがギロチンにかけられ、それ以来、共和政の道を歩んできました。ただしこれは大づかみにとらえた歴史の話で、現実には王政復古があり、またナポレオン・ボナパルトやナポレオン3世による帝政期もありました。

つまり、王党派と帝政派による揺り戻しの脅威にさらされながら、フランスは第一、第二、第三共和政の道を歩んできたわけです。そうした揺り戻しにたいする民衆蜂起のひとつが七月革命でした。

ところで、マリアンヌと自由の女神が同一視されているという、ややこしい話をしてみました。ここにもうひとり「平和の女神」という神さまもいて、彼女もマリアンヌとほぼ似た存在と見なされています。

詰まるところ、「マリアンヌ」、「自由の女神」、「平和の女神」の3人は、少なくともフランスの共和政治のもとでは一体視されていました。ちなみに、平和の女神はギリシャ神話にでてきます。

あらためてマリアンヌに焦点を当てます。さきほどのマリアンヌをレリーフにした硬貨が鑄造されたのは、1962年から2001年まででした。この時期は第五共和政に当たります。彼女は切手にもなっています。

マリアンヌが歴史上一番活躍したのは、第三共和政の時代です。第三共和政は1870年から1940年までつづいています。ナポレオン3世が普仏戦争でドイツ軍に捕らえられて失脚した後から、第二次大戦でフランスのヴィシー政権ができたときまでです。

こうして見ると、マリアンヌという架空の人物は、共和政の守り本尊であったことが推測されます。

ついでに言えば、自由、平等、友愛を示す三色旗も、共和政治のなかで出てきました。それから、ラ・マルセイエーズもこの頃からフランス国歌になっています。共和政治をつくり、それを守ろうという気持ちの現れのひとつがマリアンヌだったということです。

ところで意外なことに、第三共和政の政治家たちはフランス全土に対して、象徴としてのマリアンヌの重要性は訴えるのですが、ここがフランス人の気骨だなと思うのは、重要性は訴えても、じゃあ国民はマリアンヌを信仰しなさいと、短絡的なことはいわなかった

ことです。

アンシャン・レジームは否定するのですが、だからといって、それに取って代わる共和政治の象徴はマリアンヌだから、マリアンヌを拝みましょうということはいわなかったのです。

現実には、マリアンヌの像はフランス全土に広まっていきました。いささか乱暴なたとえですが、マリアンヌは二宮尊徳と似ていたように思います。以前は日本全国の、津々浦々の小学校に、薪を背負って本を読みながら歩く二宮尊徳像が建てられていました。

戦前の日本社会では、二宮尊徳は庶民に処世哲学を教え、忠心報国をうながす象徴でした。地方に行くと古い小学校にはまだ建っています。私も何個か見たことがあります。

話を戻しますと、二宮尊徳も法律で設置が義務づけられていたわけではないのですが、それと同じように、マリアンヌ像も自発的に、もちろん共和主義者によって、フランスのあちこちの村に建てられていきました。

そうしたマリアンヌ像をいくつか見てみましょう。ただし正直にお話ししますと、私はこの話をするのにあたって、フランスに行って、現地で写真を撮ってこようと目論んでいたのですが、コロナで予定が全部ダメになってしまいました。ですからこれから紹介するのは、本やインターネットで集めてきた画像です。渡航できるようになれば、自分で写真を撮ってきて、みなさんに見てもらいたいと思っています。

最初に紹介するのは、ジョンザックという街にあるマリアンヌ像です。ジョンザックはフランスの片田舎で、地図でいうと南西の方でボルドーの少し下にあります。そこで1894年に建てられたマリアンヌです。

これ、どこかで見たようなポーズではありませんか。松明を掲げています。右手と左手の逆はあるのですが、ニューヨークの自由の女神のポーズに似ていますね。こんな風に、マリアンヌと、自由の女神は通底しているのです。

2番目に紹介するのは、パリのナシオン広場のマリアンヌです。ナシオンというのはネイション、国家のことです。だから国民広場みたいなところですよ。これは1899年に制作されています。全体は《共和国の勝利》という名前の記念碑です。

3番目に紹介するのは、フランスの元老院（上院）に置かれているマリアンヌの胸像です。これは例のフリジア帽は被っていません。

どうやって、元老院の内部に入れてもらうかという問題はありますが、渡航できるようになったら撮影してきたいと思っています。

4番目に紹介するのは、ブルボン宮殿のマリアンヌ像です。ブルボン宮殿というのは、例のブルボン王朝の宮殿です。先ほどの、ルイ16世とマリー・アントワネットがギロチンにかけられたコンコルド広場から、セヌ川を渡った左岸にある宮殿です。そのなかに郵便局があるそうで、このマリアンヌ像はそこに置かれています。

左手でオリーブの枝を持っているのですが、これは平和の女神の象徴です。このマリアンヌでは、平和の女神と一体化しているわけです。彼女の帽子はフリジア帽ですね。ヘルメット風ではありますが、まあフリジア帽でしょう。

右手でもっているものはなんだかわかりません。かつてパンアメリカン航空という会社があって、その会社の商標に、地球儀に羽が生えたようなデザインがありましたけど、そういう「パン（汎）」、つまり世界をあまねく照らすという意味を示すアイコンなのかもしれません。すみません、調べがついていないくて。

5番目に紹介するのは、1940年に制作されたマリアンヌのポスターです。書き込まれている文字は、上が「La liberté pour la France（フランス国家のための自由）」で、下が「les libertés pour les Français（フランス国民のための自由）」です。国家のためだけでなく、国民のための自由、すなわち共和政万歳といったところでしょう。マリアンヌが例の帽子を被って、三色旗と一緒に描かれています。ここでお茶の時間にしましょう。

「後期市民」階級

再開します。ここまでさまざまなマリアンヌを紹介してきましたが、ここからは、当時のフランス政治の話をしながらか、そのなかでマリアンヌを共和国の象徴として共和政治を打ち立てた人たちの、心の内を探ってみようと思います。

なぜこんな話をするのかといいますと、これまで私は市民階級（ブルジョワジー）が登場して、その人たちが共和政を築いてきたという話をしましたけれど、実際はそう単純でもなかったからです。どこが単純じゃないのかといいますと、市民階級と一口にいても、実は第一次世界大戦前の市民階級と後のそれとでは、だいぶ違うのですね。同じ人間が生きていたかもしれないけれど、彼らの意識が変わったといってもよいかもしれません。

どう変わったかといいますと、第一次世界大戦は1914年から1918年までで、日本でいえば大正時代ということになりますが、戦前の市民階級は今の目から見ると伝統的な価値観をもっていた人たちで、儀礼の場とか、人と人との礼節とか、そういう社会の一番根っここの部分を支えていく価値観が伝統的だったのですが、戦後の市民階級はそういう価値観

を受け継がないで、自分たちの時代をつくるのだという意識が強くなったという点です。

たとえばみなさん、こんな言葉を聞いたことはありませんか。『狂躁の20年代』。先日、私はNHKに行って、以前BSの特別番組で放映された「狂躁の20年代」という番組を見せてもらってきました。一時間半番組でした。

20年代とは、もちろん1920年代のことです。英語では『Roaring Twenties』というそうです。狂躁の20年代には、それこそみなさん『映像の世紀』なんかでご覧になったことがあると思うのですが、日本人の藤田嗣治もパリへ行って、夜な夜な、ブラッスリーやレストランで乱痴気騒ぎをしたということです。

それからモンパルナスのキキというカリスマ的モデルがいて、貧乏絵描きたちからは、それこそ女神としてもてはやされました。藤田も彼女を描いています。それから以前、ここでも展覧会をしましたが、キスリングも描いています。若くて貧乏な絵描きや詩人たちが、享樂的な一面をもつ自分たち自身の時代をつくりました。

そういう時代の経済的な立役者が、戦後の市民階級です。ですから彼らのことは、戦前の市民階級とは区別して、『後期市民』階級と呼び分けておいた方がわかりやすいと思います。これは、私の造語ではありますが……。

フランスは第一次世界大戦で疲弊はしたけども、一応戦勝国になったから、ドイツから多額の賠償金をもらうのですね。それが払えなくてドイツはまた世界大戦に突入するのでしょうけれども。フランスはそのおかげで戦後復興の好況期を迎えます。それがあったので、にわか長者のような後期市民が登場して、狂躁の20年代が生まれたわけです。

狂躁の20年代

この時代には、アメリカの富豪が大量にパリにやってきました。当時のことですから、ニューヨークから大きな外洋客船に乗って、ノルマンディーのル・アーヴル港に着くのですが、NHKの番組によれば一番盛りのときには、一日に大型外洋客船が7隻も入港したとっていました。

でも考えてみれば、コロナ以前は東京とパリの航空便でも、一日に何便も飛んでいましたね。エールフランスだけでも2便か3便、日本航空や全日空でも2便あったと記憶しています。それを思いだすと、20年代の大西洋航路がひんぱんだったのも頷けます。

アメリカ人はドルを大量にもってきました。番組映像のなかで、私がおやっと思ったシーンがあります。パリの街角で貧乏なフランス人が、『あなたの将来』と書いた紙切れを

かかげて辻占いをしていました。そこには 10 フランと書いてありました。

10 フランって、いまでいえばいくらでしょう。一説によれば、当時の 1 フランは、今の 200 円くらいだそうです。すると 10 フランは 2000 円ということになります。ちょっとぼつてるなあって感じがしますが、裕福なアメリカ人相手ならそんなところかなという感じもしました。

そんなアメリカ人たちのなかに、われわれが知っているアーネスト・ヘミングウェイやヘンリー・ミラーがいました。それから『偉大なるギャツビー』のスコット・フィッツジェラルド。

「ミッドナイト・イン・パリ」という映画をご覧になっていませんか。見ました？ あれの監督だれでしたっけ。

会場から ウッディ・アレン。

そうそう、ウッディ・アレンでした。本人は出ていないけれど、あれを見ると、ガートルード・スタインというアメリカ人の女性がパリに来てきます。彼女はお金持ちで、詩人、美術コレクターなどの顔をもっていました。さっきの文学者や、ピカソ、ダリなどの画家が彼女のもとに集まってサロンを形成していたそうです。

おとぎ話のような話ですが、ウッディ・アレンはそれを懐かしがって、あの映画をつくったのでしょう。

そういう時代でしたから、夜の乱痴気騒ぎは別としても、戦前の市民階級と、戦後のそれとではずいぶん違ってたと、私は考えているのです。

20 年代と地続きな現代日本

このように戦前戦後では、市民階級の構成員の気質に変化が見られるのですが、この変化には対岸の火事として傍観できないものがあると思います。戦後の狂乱、狂躁から生まれた、古いブルジョワジーの価値観から解放された人たちの生き方が、意外にも、現代の日本にも受け継がれているからです。

一例だけ挙げると、「生活」というものにたいするわれわれの考え方は、狂躁の 20 年代に形成されたそれを引き継いでいます。

たとえば皆さん、生活はエンジョイするものだと思っていないませんか？ 生活と聞いて、

暗くて辛い、明日の食べ物がない、米櫃が空っぽだと思い浮かべる人は、まずこのなかにはいらっしやらないでしょう。

でも私の子供の頃は、生活とはそういうものでした。でも今は美食の時代です。食べ物だけではなく、ブランドものを着るとか、家もそれなりに個性的に建てるとか。それから旅行だって、テレビが宣伝しているものはみんな豪華です。昔は青春 18 切符か、よくても周遊券が相場でした。

みなさんがご自分の家を建てるとすれば、何を一番の基準にしますか？

会場から 家のまわりの景色とか。

なるほど。美的要素や楽しさを、まず前提にしますよね。ともかく雨風が凌げて、寒くなければよいという方は、まずいない。

私の考えでは、現代においては家の一番の価値って、アメニティだと思います。つまり心地良さ、あるいは愉悅です。

第一次大戦前のフランス社会は、いくらブルジョワジーが王侯貴族をギロチンにかけて実力をもったとはいえ、まだまだいつ反革命がおきて、再びボナパルト（ナポレオン 4 世）が出てくるかわからなかった。それから選挙で王党派が増えて、王政復古される怖れもあった。

それに、いつなんどきドイツが攻めてくるかわからない。そんな時代だったわけです。だけど今はそんなことはない。そんな不安が拭い去られたのは、やはり狂躁の 20 年代を迎えてからでしょう。

それ以降、家の要件とは心地良いこと、景色が良いこと、という風に変化してきました。私は現代「生活」の原点に、後期市民たちの思想・信条があったと考えているのです。

じゃあ本当に家って、先程からお話ししているように、心地良いということだけが目的であるべきなのかと問われたら、誰にもわかりません。わからないけど、われわれはそういうイメージをもっている。そのイメージとは、私の言い方をすれば「神話」ということになります。結局われわれは、現代社会の起源にそういう神話をもっているのだと、私は考えています。そういう神話の中枢にマリアンヌがいました。

政教分離

あと少しの時間を使って、マリアンヌがキリスト教の神のような崇拜の対象ではなかったことを確認しておきましょう。

そのことは、市民階級が打倒したアンシャン・レジームのヒエラルキーのなかでは、最上位の身分は王侯貴族ではなく、聖職者だったことが示しています。聖職者とは、すなわちカトリックの僧侶のことです。

市民階級のなかでもとくに共和制を奉じた人たちは、「政教分離」を掲げました。厳密にいうと、政教分離の法律の制定は 1905 年まで待たなければなりませんでしたが、1881 年にはその精神を示す言説が登場しています。

第三共和政のもとでは、大革命の発端となったバスティーユ襲撃の日、つまり 7 月 14 日は国民の祭日ですが、1881 年のその日に、宗教大臣が民衆にむけて、カトリックの教会に行ってはならない、カトリックの宗教行事をおこなってはならないと言い切っているのです。

アンシャン・レジームを倒したことの大きな側面は、カトリックと手を切ったことだったのです。こうしてカトリックと入れ替わるようにして、マリアンヌが愛国心の象徴となっていきました。

共和政と大佛次郎

フランスの第三共和政は、日本の知識人にもシンパシーをいだかせました。第三共和政の体制は、王党派や帝政派によってなんども脅かされましたが、なかでも大きな危機は、ブーランジェ将軍事件とドレフェス事件でした。

ブーランジェ将軍の話は有名ですから、みなさんもこの人物の名前は聞いたことがあるのではないのでしょうか。この『ブーランジェ将軍の悲劇』という文庫本は、なにかの気の迷いで私が 40 年前に買ったものですが、その著者は時代劇小説の『鞍馬天狗』あたりをとった大佛次郎です。

そんな大佛次郎が 1935 年に、フランスの共和政治の出来事を書いているのです。不思議でした。でも最近、共和政に関心をもって読み直してみると、なんとなくわかってくるものがありました。戦前戦後の日本の知識人にとっても、フランスの共和政が潰れそうになりながらも守られてきたという問題は、関心の的だったのでしょう。おそらく大佛は、フランス国民の政治意識あるいは社会意識に共鳴していたのです。

だから、大佛次郎はブーランジェ将軍事件を擁護しているわけではなくて、どちらかといえば冷徹に見ています。

ブーランジェ将軍は、共和政を倒そうとする王党派や、帝政を復活させようとするボナパルト派によって、その頭目として祭り上げられた人物だったからです。陸軍にはとくに帝政派が多かったのですが、ブーランジェ将軍はその陸軍大臣に就いています。彼はその権限をもって、民衆が喜びそうなことをやったものだから、共和政がいつとき危なくなり、クーデターの一步手前までいったのですが、彼は結局立ち上がりませんでした。その後、ブーランジェ将軍はベルギーに追われて、そこで没します。

こういう人物を葬り去った共和政への共感が、大佛にこういう本を書かせたのではないのでしょうか。

もうひとつ、第三共和政を揺るがした出来事に、ドレフュス事件というものがありました。

ドレフュスという人は、陸軍参謀本部の砲兵大尉でした。この人が、ドイツのスパイだという嫌疑をかけられ逮捕されます。この逮捕がだんだんと波紋を広げ、またこの人物はユダヤ人だったこともあって、結局は先程と同じ構図ですね、自由と平等とそれに基づいた共和主義を守ろうとする市民と陸軍との対立に発展していきました。

そこには、エミール・ゾラも参戦しています。最後は、時間はかかりましたがドレフュス無罪判決によって終わります。

これについても、大佛次郎は『ドレフュス事件』という著作を1930年に残しました。